

〔論 説〕

「西洋の救済」(2)

——戦間期における

「西洋(アーベントラント)」概念の政治化——

板 橋 拓 己

<目次>

はじめに

第一章 キリスト教民主主義の国際ネットワークとヨーロッパ統合

第一節 戦間期の国際協調の模索

——キリスト教民主主義政党国際事務局(SIPDIC)

第二節 亡命者のネットワーク

第三節 NEI(1947-1965年)

第四節 ジュネーブ・サークル(1947-1955年)

第五節 ジュネーブ・サークルとアデナウアー外交

——「西側結合」の貫徹

第六節 キリスト教民主主義の「ヨーロッパ」

——「西洋」へのドイツの再統合 (以上、77号)

第二章 戦間期における「西洋(アーベントラント)」概念の政治化

——雑誌『アーベントラント』とヘルマン・プラッツを中心に

第一節 政治的な闘争概念としての「アーベントラント」

第二節 雑誌『アーベントラント』(1925-1930年)

第三節 ヘルマン・プラッツの「アーベントラント」思想(以上、本号)

第三章 ナチズムと「アーベントラント」 (以下、続刊)

第二章 戦間期における「西洋（アーベントラント）」概念の政治化——雑誌『アーベントラント』とヘルマン・プラッツを中心に

前章では、戦間期以来のキリスト教民主主義の国際ネットワークを概観しつつ、そのヨーロッパ統合政策を支えたものとして、「西洋の救済」、あるいは「西洋」へのドイツの再統合というモチーフがあることを示した。ここで注目すべきは、そうした「西洋」という、ヨーロッパの統合または統一に纏わるトポスは、一般に言われるところの「キリスト教民主主義者」にとどまらず、必ずしも民主主義者とは言えない、宗教的な保守派の人々にも好んで用いられてきたことである。たとえ反近代的で、自由民主主義的な諸価値を受容していなくとも、「西洋」というトポスを通じてヨーロッパ統合を支持する勢力は、戦間期以来、広範に存在した。

そこで本章以下では、主としてドイツ語圏において「西洋（アーベントラント: Abendland）」というスローガンを掲げて、ある種のヨーロッパ統合を支持してきたキリスト教保守派の人々、所謂「アーベントラント主義者（Abendländer）」の思想と運動を検討する¹。本章では、まず第一節で「西洋」概念の意味内容を簡単に確認した後、第二節以降において、いま一度戦間期に立ち返り、1925年に創刊された雑誌『アーベントラント』を中心に、「アーベントラント主義」の源流を辿る。

第一節 政治的な闘争概念としての「アーベントラント」

そもそも「西洋（Abendland）」とはいかなる概念か。まずは、この概念の由来や含意を確認しよう。Abendlandは、ドイツ語で「晩」「夕方」「夜」を意味するAbendと「土地」を意味するLandが組み合わされた語であり、「陽の沈む土地」を意味する（英語のOccidentに対応する）。よく知られているように、これは「ヨーロッパ」の語源と重なっており²、実際「ヨーロッパ」と互換的に用いられもする。日本語でもAbendlandは、

1 かかる主題は、以下の拙稿で素描したことがある。「黒いヨーロッパ——ドイツにおけるキリスト教保守派の「西洋」主義」遠藤乾・板橋拓己（編）『複数のヨーロッパ——欧州統合史のフロンティア』北海道大学出版会、2011年、81-116頁。本章以下の記述は、前掲論文の問題意識を引き継ぐものだが、史資料も叙述も大幅に拡充しており、ほぼ別物である。

「西洋」だけでなく、文脈によっては「西欧」とも「ヨーロッパ」とも訳されてきた（以下本稿ではAbendlandを、同じく「西欧」や「西方」「西洋」と訳されるものの、似て非なる語であるWesteuropaやWestenなどと区別するため、「アーベントラント」と片仮名で表記する）。

問題は、この「アーベントラント」が政治理念やスローガンに転じたときである。この場合「アーベントラント」は、単なる地理的表象であることを超えて、「西洋」共通の文化的な紐帯に基づいたヨーロッパ諸国民・諸民族の連帯を説く概念として機能する。この政治化・イデオロギー化が生じたのは、19世紀である。「アーベントラント」は、1789年のフランス革命の理念に対抗するものとして、メッテルニヒ時代に保守主義者やロマン主義者たちのあいだで流通した³。こうして「アーベントラント」は、歴史的には保守派、とりわけカトリック保守派のヨーロッパ主義者のイデオロギーとして用いられるようになった。そしてこの概念を人口に膾炙させたのは、第一次世界大戦が終結した1918年に第一巻が出版され大ブームとなったシュペングラー（Oswald Spengler, 1880-1936）の『西洋（西欧）の没落（*Der Untergang des Abendlandes*）』であったと言えよう。

ではここで、些か論点先取りになるが、「アーベントラント」が政治的なスローガンに転じたときに込められる含意のなから最大公約数を引き出してみよう。第一に、何よりもそれは反近代の概念である。「アーベントラント」に含意されているのは、宗教改革以前の全一なるキリスト教的共同体としてのヨーロッパへの郷愁であり、中世への憧憬である。かかる反近代という含意から、さらに以下の諸含意も導き出される。

すなわち第二に、「アーベントラント」は反自由主義的志向を内包している。近代の産物たる理性的で主体性を持つ個人という仮構を否定し、人間の限界、すなわち理性の限界を説く概念となるのである。同様の人間学的前提から、第三に、「アーベントラント」の称揚は反民主主義的志向にも繋がる。ここからエリート主義的な主張が導き出されることは言うまで

2 遠藤乾・板橋拓己「ヨーロッパ統合の前史」遠藤乾（編）『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、2008年、20-53頁、22頁。

3 転機はフリードリヒ・シュレーゲル（Friedrich Schlegel, 1772-1829）の『歴史哲学』（1828年）であるという。Vgl. Axel Schildt, *Zwischen Abendland und Amerika. Studien zur westdeutschen Ideenlandschaft der 50er Jahre*, München: R. Oldenbourg, 1999, S. 24.

もない。そして第四に「アーベントラント」には、近代政治の獲得物である自由主義的な代議政治の否定、すなわち反議会主義の主張も含まれる。この主張は、古典的コーポラティズムに代表される職能身分制秩序に基づく政治システムの推奨に繋がっていくだろう。最後に「アーベントラント」は反中央集権主義も志向する。理想化された神聖ローマ帝国が範とされ、政治秩序としては連邦主義が称揚される。

以上の含意を備えた「アーベントラント」が、とりわけドイツ語圏において、戦間期には独仏協調のシンボルとして、また冷戦期には反東側・反共のプロパガンダ概念として機能した。この概念に関する先駆的研究は、「アーベントラント」を「政治的な闘争概念」と規定している⁴。そして注目すべきは、戦間期から冷戦期に至るまで、「アーベントラント」という概念をシンボルとしてメディアや運動体が組織されてきたことであり、本稿が以下で対象とするのも、この「アーベントラント」運動に他ならない。

第二節 雑誌『アーベントラント』(1925-1930年)

アーベントラント運動で特筆すべきは、戦間期からの人的・思想的な連続性である。そこでまずは、戦間期におけるアーベントラント運動を概観してみよう⁵。本節では、ヴァイマル共和国時代に「アーベントラント」というシンボルを掲げ、運動のプラットフォームとなった月刊誌『アーベントラント』について考察する。

雑誌『アーベントラント』とその背景

前述のように、大陸ヨーロッパのカトリック知識人や政治家たちの国境を越えた組織化は、第一次大戦以前にまで遡ることができる。たとえば、マリア・ラーハ修道院周辺の典礼運動(Liturgische Bewegung)やカトリック・アカデミカー連盟(Katholischer Akademikerverband)の存在が挙げられよう⁶。これら教会と結びついたカトリック知識人の運動は、前章で論じた戦間期以降における各国キリスト教政党の国際協働の前提ともなった。典礼運動の最初のドイツ会合(1913年)に参加したロベール・

4 Richard Faber, *Abendland. Ein politischer Kampfbegriff*, 2. Aufl., Berlin: Philo, 2002 (zuerst 1979).

シューマンは、1959年に当時を回顧して次のように述べている。

この出会いはわれわれにとって事件であり、共通の出発点だった。
[……] 協調と統一と友愛への道を拓く一切のものが同じ源泉から生
み出されるということ、当時われわれはすでに認識し始めていた。
この意味で、マリア・ラーハも将来のヨーロッパのための礎石だった
のである⁷。

そして、これらの運動に従事していたボン大学のヘルマン・プラッツ
(後述) の主導で戦間期に刊行されたのが、雑誌『アーベントラント

-
- 5 第二次世界大戦以前の「アーベントラント」については、ペッピングの博士論文が、カトリックのみならずプロテスタントについても検討しており、包括的である。Dagmar Pöpping, *Abendland. Christliche Akademiker und die Utopie der Antimoderne 1900-1945*, Berlin: Metropol Verlag, 2002. 他にも以下を参照。Heinz Hürten, “Der Topos vom christlichen Abendland in Literatur und Publizistik nach den beiden Weltkriegen,” in: Albrecht Langner (Hg.), *Katholizismus, nationaler Gedanke und Europa seit 1800*, Paderborn u.a.: Schöningh, 1985, S. 131-154, bes. S. 131-145; Axel Schildt, “Deutschlands Platz in einem „christlichen Abendland“. Konservative Publizisten aus dem Tat-Kreis in der Kriegs- und Nachkriegszeit,” in: Thomas Koebner, Gert Sautermeister u. Sigrid Schneider (Hg.), *Deutschland nach Hitler. Zukunftspläne im Exil und aus der Besatzungszeit 1939-1949*, Opladen: Westdeutscher Verlag, 1987, S. 344-369; Guido Müller und Vanessa Plichta, “Zwischen Rhein und Donau. Abendländisches Denken zwischen deutsch-französischen Verständigungsinitiativen und konservativ-katholischen Integrationsmodellen 1923-1957,” *Journal of European Integration History*, vol. 5, no. 2, 1999, pp. 17-47, esp. pp. 20-30; Vanessa Conze, *Das Europa der Deutschen. Ideen von Europa in Deutschland zwischen Reichstradition und Westorientierung (1920-1970)*, München: R. Oldenbourg, 2005, S. 27-110.
- 6 Vgl. Guido Müller, “Katholische Akademiker in der Krise der Moderne. Die Entstehung des Katholischen Akademikerverbands im wilhelminischen Deutschland zwischen bildungsbürgerlichen Reformbewegungen und Laienapostolat,” in: Michael Graetz und Aram Mattioli (Hg.), *Krisenwahrnehmungen im Fin de siècle. Jüdische und katholische Bildungseliten in Deutschland und der Schweiz*, Zürich: Chronos, 1997, S. 285-300.
- 7 Zit. aus Müller & Plichta, “Zwischen Rhein und Donau,” S. 21.

(*Abendland. Deutsche Monatshefte für europäische Kultur, Politik und Wirtschaft*)』である。この雑誌の編者陣には、オーストリア首相イグナツ・ザイベル (Ignaz Seipel, 1876-1932) をはじめ、後述するように、ドイツやオーストリアの有力なカトリック政治家・知識人がいた。また寄稿者を一瞥すると、ヴァルター・ディルクス (Walter Dirks, 1901-91)、ヴァルデマール・グリアン (Waldemar Gurian, 1902-54)、ルートヴィヒ・カース (Ludwig Kaas, 1881-1952)、オイゲン・コーゴン (Eugen Kogon, 1903-87)、オズヴァルト・ネル＝ブロイニング (Oswald von Nell-Breuning, 1890-1991)、カール・シュミット (Carl Schmitt, 1888-1985)⁸、オトマール・シュパン (Othmar Spann, 1878-1950)、ストゥルツォーら当時のカトリック知識人・政治家の錚々たる面々が揃っている。さらに『アーベントラント』は、旧ハプスブルク君主国の貴族カール・アントン・ロアン公爵 (Karl Anton Prinz Rohan, 1898-1975) が主導し、ヨーロッパ知識人ネットワークの一角を形成していたヨーロッパ文化同盟 (Europäischer Kulturbund / Fédération des Unions Intellectuelles) および月刊誌『ヨーロッパ・レビュー (*Europäische Revue*)』と密に交流していた⁹。

執筆陣の多様性からも分かるように、『アーベントラント』は雑誌として必ずしも纏まったメッセージを発していたわけではない。たとえば、ヴァイマル共和国に対する態度一つをとっても、共和国を積極的に支持していた者たちもいれば、所謂「理性の共和国派」もいたし、「保守革命」や「青年保守」派に分類されるような文筆家たちも多数参加していた。とはいえ、少なくとも主導者であるプラッツたちは、偏狭なナショナリズムを非難し、キリスト教に基づいたヨーロッパ諸民族の連帯、とりわけ独仏間の連帯を説いていたのであり、その文脈から、相対的安定期におけるシュ

8 なお、ケーネンのシュミット伝は、『アーベントラント』をシュミットの「論壇活動の跳躍台 (publizistische Startrampe)」としているが、シュミットが『アーベントラント』をそこまで重視していたかは疑わしい。またケーネンは、『アーベントラント』の「中心人物 (spiritus rector)」としてシュミットを位置づけているが、これも同志に対するシュミットの影響力を過大評価しているように思われる。Vgl. Andreas Koenen, *Der Fall Carl Schmitt. Sein Aufstieg zum „Kronjuristen des Dritten Reiches“*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1995, S. 51.

トレーゼマン (Gustav Stresemann, 1878-1929) の協調外交も支持していたのである。

なお、なぜ戦間期に (とりわけカトリック層に) 「アーベントラント」概念がもて囃されるようになったかは、いくつかの要因がある。何よりも「ヨーロッパの自殺」(教皇ベネディクト15世) と称された第一次世界大戦を抜きにしては「アーベントラント」の流行は考えられない。前述のように、大戦終結時の1918年にはシュペングラーの『西洋 (アーベントラント) の没落』(第一巻) がベストセラーとなった。そして、大戦によって破壊されてしまった「西洋」の全一性を取り戻すために、「アーベントラント」は一つのシンボルとなったのである。また、とりわけドイツ国内においては、ドイツに対して懲罰的な「勝者の平和」たるヴェルサイユ体制を乗り越えるシンボルとしても用いられた。さらに、敗戦と帝政の瓦解が、同時にプロイセン=プロテスタント的な社会秩序モデルの崩壊と認識されたことも挙げられる⁹。その上で、近代リベラリズムも受容できないカトリック層にとって、「アーベントラント」という秩序像が一層重要性を増したのだと言えよう。

9 ヨーロッパ文化同盟の目的は、ロアンによると「高次のエリート・レベルで、ヨーロッパ意識の担い手としての精神的・社会的な上流階級の形成を支援すること」とあり、最盛期には14カ国にまたがる活動を見せていた。Vgl. Karl Anton Rohan, *Heimat Europa. Erinnerungen und Erfahrungen*, Düsseldorf / Köln, Eugen Diederichs, 1954, S. 56. ロアンとヨーロッパ文化同盟については、ミュラーの教授資格取得論文をもとにした次の著作に詳しい。Guido Müller, *Europäische Gesellschaftsbeziehungen nach dem Ersten Weltkrieg. Das Deutsch-Französische Studienkomitee und der Europäische Kulturbund*, München: R. Oldenbourg, 2005. ミュラーとは異なり、中東欧史の視点からロアンを論じたものとして、福田宏「ポスト・ハプスブルク期における国民国家と広域論」池田嘉郎(編)『第一次世界大戦と帝国の遺産』山川出版社、近刊。『ヨーロッパ・レビュー』の分析は、Hans Manfred Bock, "Das 'Junge Europa,' das 'Andere Europa,' und das 'Europa der weißen Rasse.'" Diskurstypen in der Europäischen Revue 1925-1939," in: *Le discours européen dans les revues allemandes (1933-1939) / Der Europadiskurs in den deutschen Zeitschriften (1933-1939)*, hg. von Michel Grunewald, in Zusammenarbeit mit Hans Manfred Bock, Bern u.a.: Peter Lang, 1999, S. 311-351.

なお、ロアンや『ヨーロッパ・レビュー』に関する史料や情報については、京都大学の福田宏氏からご提供いただきました。記して感謝いたします。

『アーベントラント』の編集責任者

では、『アーベントラント』はどのような人々が担っていたのだろうか。ここで、本誌に編集責任者(Herausgeber)や主筆(Schriftleiter)として関わった人々のプロフィールを並べ、検討していこう(ただし、中心人物であったプラッツについては後述する)。カッセル大学で独仏関係研究に従事し、『アーベントラント』を取り巻くネットワークについて論文を著したボックは、同誌の編集責任者を三つのグループに分けている¹¹。すなわち、出版関係者、政治家、知識人である。

第一のグループである出版関係者に属するのは、カール・ヘーバー(Karl Hoeber, 1867-1942)、ユリウス・シュトッキー(Julius Stocky, 1879-1952)、リヒャルト・キュンツァー(Richard Kuenzer, 1875-1945)の三人である。熱心な中央党員であるヘーバーと、カトリックの出版業者として国際的に活躍していたシュトッキーは、ともに中央党の機関紙の一つ『ケルン人民新聞(*Kölnische Volkszeitung: KVZ*)』の中心人物であった。『ケルン人民新聞』は、中央党の機関紙のなかで最も発行部数が多いものだったが、1920年代以来、ライン中央党の人々がその主導権を握っており、ベルリンからは距離を置いていた。

他方、外交官出身のキュンツァーは、ベルリンの日刊紙『ゲルマニア

10 Vanessa Plichta, "Reich - Europa - Abendland. Zur Pluralität deutscher Europaideen im 20. Jahrhundert," *Vorgänge. Zeitschrift für Bürgerrechte und Gesellschaftspolitik. Nr.154: Im Sog des Westens*, Jg. 40, Heft 2, 2001, S. 60-69, hier S. 62. ドイツ・プロテスタンティズムと第二帝政との結びつき、および帝政崩壊とプロテスタンティズムの対応については、深井智朗『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム——ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』教文館、2009年；同『ヴァイマルの聖なる政治的精神——ドイツ・ナショナリズムとプロテスタンティズム』岩波書店、2012年。

11 以下、『アーベントラント』の編集責任者と主筆については、基本的に次のボックの論文に拠る。Hans Manfred Bock, "Der Abendlandkreis und das Wirken von Hermann Platz im katholischen Milieu der Weimarer Republik," in: *Le milieu intellectuel catholique en Allemagne, sa presse et ses réseaux (1871-1963)/ Das katholische Intellektuellenmilieu in Deutschland, seine Presse und seine Netzwerke (1871-1963)*, hg. von Michel Grunewald und Uwe Puschner, in Zusammenarbeit mit Hans Manfred Bock, Bern u.a.: Peter Lang, 2006, S. 337-362.

(*Germania. Zeitung für das Deutsche Volk*)』の編集長を務める、中央党左派の人物だった。キュンツァーは、前章で扱ったカトリック政党の国際ネットワークであるSIPDICのドイツ代表団の一人であり、「ヨーロッパ合衆国」の唱道者だった。ミュラーによると、彼のヨーロッパ構想は「アンシュルス理念、独仏和解、中欧イデオロギー、アーベントラント意識を結びつけたもの」だったようである¹²。なおキュンツァーは、党内右派のパーベンが『ゲルマニア』の筆頭株主となって同紙の主導権を握るようになると、1927年に編集長職を罷免されている。彼は、ナチス時代はレジスタンスに参加し、44年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件に関与したとされ、親衛隊に殺害されている。

第二の政治家グループとしては、前述のようにオーストリアの首相ザイベル（首相在任は1922年5月～24年11月、26年10月～29年5月）とともに、フーゴー・レルヒェンフェルト伯（Hugo Graf von Lerchenfeld-Köfering, 1871-1944）、そしてヨハネス・ホリオン（Johannes Horion, 1876-1933）とヴィルヘルム・ハーマッハー（Wilhelm Hamacher, 1883-1951）がいる。周知のようにザイベルは、高位の聖職者であり神学教授であると同時に、1920年代にオーストリア・キリスト教社会党の総裁を務めた大政治家である。首相在任時には、国際連盟に忠実な外交政策をとりつつ、オーストリアの経済再建に努めていた¹³。また、元バイエルン首相であり、バイエルン人民党のライヒ議会議員も務めていたレルヒェンフェルトは、1926年7月にオーストリア駐在ドイツ公使に就任し、独塊の結びつきの強化に尽力した人物である。彼は、1931年の独塊関税同盟計画にも関与することになる¹⁴。上記2人に比べると、ホリオンとハーマッハーは、ともにライン中央党の重要人物であるものの（前者はライン州の地方長官、

12 Müller, *Europäische Gesellschaftsbeziehungen nach dem Ersten Weltkrieg*, S. 59-65, hier S. 62.

13 邦語のザイベル研究として、その統治については、細井保『オーストリア政治危機の構造——第一共和国国民議会の経験と理論』法政大学出版社、2001年、第3章。その政治構想については、梶原克彦『オーストリア国民意識の国制構造——帝国秩序の変容と国民国家原理の展開に関する考察』晃洋書房、2013年、第1章および第2章を参照。

14 北村厚「アンシュルス運動におけるヨーロッパ的展望——関税同盟の議論を中心に」『政治研究』（九州大学）第60号、2013年、159-187頁、とくに164-165頁。

後者はライヒ参議院議員などを歴任)、『アーベントラント』では影が薄かった。ボックによると、この『アーベントラント』の編集責任者委員会における政治家グループの構成は示唆的である。なぜなら、彼らによって「ケルン＝ミュンヘン＝ウィーンというラインが描き出されており、アーベントラント・サークルにおける大ドイツ的な要素が表現されている」からである¹⁵。

編集責任者のうち、前述の政治家たちは概して保守的だったが、第三のグループ、すなわち知識人のグループは（後述のプラッツも含めると6人いる）、どちらかと言えばカトリックのなかでは左派的な人々が多かった。フランツ・クサファー・ミュンヒ (Franz Xaver Münch, 1883-1940) は、カトリック・アカデミカー連盟の創設者であり、1916年以来その書記長 (Generalsekretär) を務めていた。ミュンヘン大学の法史学者コンラート・バイエルレ (Konrad Beyerle, 1872-1933) は、バイエルン人民党から国民議会 (Nationalversammlung) およびライヒ議会議員として24年まで活躍した政治家でもあり、ヴァイマル憲法の起草にも関わった人物でもある。彼はゲレス協会 (Görres-Gesellschaft) の副会長としてカトリック・ミリュエに影響力を持ち、『アーベントラント』の編集責任者には二年目から加わった。ゲッツ・ブリーフス (Götz Briefs, 1889-1974) は、著名なカトリックの社会倫理研究者であり、ドイツにおける産業労働者の「疎外」を研究していた¹⁶。フライブルク、ヴェルツブルク、ベルリンの教授を歴任し、1928年にベルリンで「経営社会学・社会的経営学研究所 (Institut für Betriebssoziologie und soziale Betriebslehre)」を立ち上げた。テオドール・ブラウアー (Theodor Brauer, 1880-1942) も、同様にアカデミズムに属する社会倫理研究者であり、ケルン大学で社会学研究所を設立している。彼は「連帯主義的な」労働組合を唱え、実際、ヴァイマル共和国末期に、ケーニヒスヴィンターのキリスト教系労組の教育組織を指導していた。最後に、高名なカトリック思想家デンブフ (Alois

15 Bock, "Der Abendlandkreis," S. 350.

16 ブリーフスは、シュペングラーの『西洋の没落』に対する返答として、自身も『西洋の没落——キリスト教と社会主義』という本を公刊している。Vgl. Götz Briefs, *Untergang des Abendlandes. Christentum und Sozialismus. Eine Auseinandersetzung mit Oswald Spengler*, 2., verb. Aufl., Freiburg i.B.: Herder, 1921 (zuerst 1920).

Dempf, 1891-1972) が、『アーベントラント』の末期に編集責任者に加わった。

『アーベントラント』の主筆

以上のように、『アーベントラント』の編集責任者は、政治思想的な統一性は薄く、カトリック系の諸組織の名士を万遍なく集めたような構成をとっていた。これに対し、雑誌編集の日常的な業務を司る主筆 (Schriftleiter) には、若くて意欲的な知識人が就いた¹⁷。

初代の主筆は、オーストリアのフリードリヒ・シュライフォォグル (Friedrich Schreyvogel, 1899-1976) が務めた。彼は、ウィーン大学で国家学を学んだのち、文筆家として活躍しながら、ロアンの信奉者としてヨーロッパ文化同盟の創設に加わった。1927年にオーストリアの「カトリック文筆家連盟 (Katholischer Schriftstellerverband)」の会長 (Vorsitzender) に就任したため、『アーベントラント』の主筆からは退くが、引き続き編集責任者には留まり、同誌でオーストリア側の立場を代弁し続けた。なお、後述のようにシュライフォォグルは、1934年から (非合法だった) オーストリア・ナチ党に合流している。

1927年5月にシュライフォォグルの後を継いだのは、ヴェルナー・ベッカー (Werner Becker, 1904-81) である。ベッカーは法学博士であり、カール・シュミットの弟子だった。1928年から神学の研究に打ち込むため、『アーベントラント』からは退いている。32年にアーヘンの司祭に任命され、身分制国家理論を展開するようになる。

三代目にして最後の主筆を務めたのは、カール・クライン (Karl Klein) という人物である。彼は、カトリックの学生サークルである『ゲレス・サークル (Görres-Ring)』に活動基盤を有し、攻撃的な政治的カトリシズムを展開していた。

概して主筆陣は、編集責任者たちよりも攻撃的で、同時代の「保守革命」と呼ばれる人々に近い思想を代弁していたと言えよう。

『アーベントラント』の編集方針

カトリックの諸政党・諸団体の代表者を集めた編集陣営を一瞥すれば分

17 Bock, "Der Abendlandkreis," S. 352-353.

かるように、『アーベントラント』は、特定の政治的立場を表明する雑誌ではなかったし、そうなりえなかった。もちろん、ライン中央党に近い人々が相対的に多いものの、政党政治的な議論はほとんど『アーベントラント』では展開されなかった。つまり、カトリックの個々の集団をそれぞれ代表した他のカトリック・メディア¹⁸とは異なり、『アーベントラント』は、カトリックという緩やかな紐帯をもとにした、時代の最も重要な課題に関する、様々な意見のプラットフォームの形成を志向したと言ってよいだろう。

政治問題関連の記事としては、ドイツの国制をめぐるものや、ヨーロッパ政策・国際連盟政策に関するものなど根本的なものが多く、個別の政策を論じたものは少ない。とくに初期においては、極めて抽象的な論説が多い(時代が下ると、アンシュルスや、教育政策、社会政策など、個別の問題についての論説が多くなる傾向がある)。またとくに目立つのは、ドイツ以外のヨーロッパ諸国の政治、社会、文化に関するレポートである。実際、外国からの寄稿が実に多い。

このように、雑誌『アーベントラント』を通読しても、そこから雑誌独自の明確な政治思想や政治的立場を抽出することは困難である。とはいえ、大きな目的と基調は明確である。この点は、ヨーロッパ文化同盟の指導者ロアンが、自身の雑誌『ヨーロッパ・レビュー』で次のように簡潔に纏めている。「ドイツ・カトリックの生命線は、二つの目標を指し示している。この二つは、並んでいるのではなく、連続している、あるいは入り混じっていると云った方が良いかもしれない。つまり、ドイツの統一とヨーロッパの統一、民族共同体 (Volksgemeinschaft) とアーベントラントまたは統一ヨーロッパ (geeinigtes Europa) である。この課題に、[1925年] 10月1日に創刊号が出版された『アーベントラント』は取り組んでいるのである。『ヨーロッパ・レビュー』はこれを心から歓迎する [……]」¹⁹。

つまり、「ドイツの統一」と「ヨーロッパの統一」を不可分のものと捉

18 ドイツにおけるカトリックの諸々の定期刊行物とネットワークを分析した論文集として、*Le milieu intellectuel catholique en Allemagne, sa presse et ses réseaux (1871-1963) / Das katholische Intellektuellenmilieu in Deutschland, seine Presse und seine Netzwerke (1871-1963)*, hg. von Michel Grunewald und Uwe Puschner, in Zusammenarbeit mit Hans Manfred Bock, Bern u.a.: Peter Lang, 2006.

え、両者の結合とその同時の達成を目指すこと、これが『アーベントラント』の基調であった。そして、この基調の設定に最も重要な役割を果たしたのが、ヘルマン・プラッツという人物である。

第三節 ヘルマン・プラッツの「アーベントラント」思想

ヘルマン・プラッツとは誰か

前述のように、『アーベントラント』の中心人物は、ヘルマン・プラッツ (Hermann Platz, 1880-1945) というボン大学のロマニストであった。彼は『アーベントラント』の編集責任者14人のなかで、最も同誌に影響力をもった人物である。1918年のシュペングラーの著作以来「アーベントラント」概念は流行したが、この概念をカトリックの側から、早くからポジティブなかたちで鋳直したのがプラッツである。いかにしてプラッツは「アーベントラント」という概念に辿りつき、この概念に何を託したのか。まずはプラッツの人生を追ってみよう²⁰。

ヘルマン・プラッツは、1880年10月19日、プファルツのオフエンバッハ (Offenbach an der Queich) に生まれた。父ハインリヒ (1848-1915) は、農家でビール醸造業者であった。この農家という出自は、プラッツの「伝統」観に少なからぬ影響を与えていると思われる。またプラッツは、少年の頃から、父が購読していたフランス語の『メス新報 (Courrier de Metz)』に目を通し (メスはこのときドイツ帝国領)、伯父の蔵書から17・

19 Karl Anton Prinz Rohan, "Abendland," *Europäische Revue*, Jg. 1, 1925, S. 140-141. ロアンは、『アーベントラント』こそ、ヨーロッパの将来の問題に対してドイツの立場を提示するのに最適ではないかとわれわれは考える」とも述べている。

20 プラッツの経歴については次を参照。Winfried Becker, "Hermann Platz (1880-1945)," in: *Zeitgeschichte in Lebensbildern. Aus dem deutschen Katholizismus des 19. und 20. Jahrhunderts*, Bd. 12, hg. von Jürgen Aretz, Rudolf Morsey, und Anton Rauscher, Mainz: Matthias-Grünwald-Verlag, 2007, S. 22-33; ders., "Wegbereiter eines abendländischen Europa. Der Bonner Romanist Hermann Platz (1880-1945)," *Rheinische Vierteljahrsblätter*, Heft 70, 2006, S. 236-260; Vincent Berning, "Platz, Hermann Peter," in: *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 20, Berlin: Duncker & Humblot, 2001, S. 519-521; Vincent Berning (Hg.), *Hermann Platz 1880-1945. Eine Gedenkschrift*, Düsseldorf: Patmos Verlag, 1980.

18世紀のフランス文学書を借りて読み漁っていたという。他にもプラッツはスペイン語やイタリア語も好み、早くから習得していた。ロマニストになるための素養は少年時代に身につけていたと言えよう。

プラッツは1900年にプファルツのランダウでアビトゥーアを取得し、ヴェルツブルク大学、ミュンヘン大学で神学などを学んだのち、1905年にミュンスター大学で言語学の学位を取得した。この時期プラッツは、いくつかのカトリック改革派のサークル(クライス)に所属している。たとえば、学友アベレ(Theodor Abele, 1879-1965)とともに、ヴェルツブルク大学の神学者シェル(Hermann Schell, 1850-1906)の講義を聴き、彼を中心としたクライスに属していた。また、アビトゥーアに合格した1900年に、マルク・サンニエ(Marc Sangnier, 1873-1950)およびフランスの「シヨン(Sillon: 敵)」運動と出会い、そのキリスト教民主主義と平和主義に感銘を受けた²¹。さらにプラッツは、カトリック社会運動の指導者ゾンネンシャイン(Carl Sonnenschein, 1876-1929)とも接している。

このように20代の時期に青年プラッツは、「シヨン」運動などのカトリック左派、あるいはキリスト教民主主義派に共感を寄せていた。しかし、1910年に教皇ピウス10世が「シヨン」の「近代主義」を批判して破門したとき²²、プラッツはそれに従った。この事件は、プラッツが「近代(Moderne)」を再考するきっかけとなったように思われる。

ともあれ、1910年以降もプラッツは積極的にカトリックの諸運動に関わっていく。彼の周りには、ブリューニングやロベール・シューマンもいた。こうした面々が、前述のマリア・ラーハの「典礼運動」やカトリック・アカデミカー連盟の創設に関わっていたのである。またプラッツは文筆活動にも勤しみ、ムート(Carl Muth, 1867-1944)の『高地(Hochland)』に

21 プラッツとサンニエおよび「シヨン」の関係については、Winfried Becker, "Marc Sangnier und Hermann Platz. Eine frühe Wahrnehmung und Würdigung des „Sillon“ in der Münchener Zeitschrift „Hochland“,” *Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte*, Bd. 68, Heft 2, 2005, S. 1009-1028.

22 この事件については、K.v. アーレティン『カトリシズム——教皇と近代世界』沢田昭夫訳、平凡社(世界大学選書)、1973年、182-183頁；スチュアート・ヒューズ『ふさがれた道——失意の時代のフランス社会思想1930-1960』荒川幾男・生松敬三訳、みすず書房、1970年、47頁；ミシェル・ヴィノック『知識人の時代——バレス／ジッド／サルトル』塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳、紀伊国屋書店、2007年、47頁などを参照。

寄稿していた。第一次大戦が勃発すると、プラッツは東部戦線に配置されるが、また同時に知仏派として重宝され、1915年には国防省に勤務、18年には外務省に戦時プロパガンダへの協力を求められている。また、戦争中にプラッツは『高地』において、精神史的な観点からのフランス分析を次々と発表した。このときの文章は、戦後の1922年に『現代フランスにおける精神の闘争』という重厚な著作に昇華した²³。

プラッツは、戦後も様々なカトリックのネットワークと繋がり、またいくつかのサークルと接した（たとえばダルムシュタットのカイザーリング伯爵（Hermann Graf Keyserling, 1880-1946）の「知のシューレ（Schule der Weisheit）」²⁴、「自由哲学協会（Gesellschaft für freie Philosophie）」など）。そして、何よりも旺盛な著述活動を展開することで、ヴァイマル共和国の言論空間で一定の知名度を得るに至った。また学位取得後、第一次大戦前にはデュッセルドルフで、大戦後にはボンで高等学校正教諭（Studienrat）を務めていたプラッツは、当時気鋭のロマンストだったクルティウス（Ernst Robert Curtius, 1886-1956）の推挙により、1924年3月からボン大学でフランス精神史（Geistesgeschichte）の嘱託教授（Honorarprofessur）に就任した。

さて、すでに触れたように、プラッツの「アーベントラント」理念は、偏狭なナショナリズムを退け、キリスト教に基づくヨーロッパ諸民族の連帯を説くものであった。こうした思想が明瞭になってくるのは、1920年代からである。以下では、些か抽象的で学術的なプラッツの「アーベントラント」理念を、1920年代の諸著作をもとに再構成していこう。

フランスへの眼差しとライン愛郷主義

ボン大学就任前後からプラッツは、著作活動において「アーベントラント」という理念を前面に押し出すようになっていく。たとえば、それまでの論説を集めた著作のタイトルは『ラインとアーベントラントについて（*Um Rhein und Abendland*）』（1924年）とされたし²⁵、同年に出版したパンフレットも『ドイツ、フランス、そしてアーベントラントの理念』²⁶というものだった。つまり、プラッツは1925年に『アーベントラント』を

23 Hermann Platz, *Geistige Kämpfe im modernen Frankreich*, München: J. Kösel & F. Pustet, 1922.

24 プラッツはここでレルヒェンフェルト伯に出会っている。

発刊する以前から、精力的に「アーベントラント」という理念を広めようとしていたのである。

ここで注意したいのは、ラインラントのドイツ人というプラッツの立場である。周知のようにヴェルサイユ講和条約によって当時ライン左岸地域は連合国の占領下にあり、さらに戦後もラインラントはフランスの併合要求に晒されていた。つまり、ラインラントは大戦後も独仏紛争の最前線であり、プラッツらラインラントのドイツ人には、何よりもフランスの権力に対してどう向き合うかが突き付けられていた。結果的にプラッツの「アーベントラント」理念および雑誌『アーベントラント』は、独仏の緊張が緩和した相対的安定期を背景に受容されることになるが、その誕生の契機はラインラントのドイツ人の危機意識だったのである。現に、すでに1923年の時点でプラッツは、デンプフとともに『キリスト教的西洋 (*Occidens Christianus*)』という国際的な月刊誌の刊行を計画していた²⁷。

さて、プラッツの「アーベントラント」理念の特徴と強みは、ラインラントのロマンストとして、他のドイツ知識人よりも、フランスの歴史と現状に(彼なりに)通じていたことである。1924年に彼は次のように書いている。

25 Hermann Platz, *Um Rhein und Abendland*, Burg Rothenfels am Main: Dt. Quickbornhaus, 1924. すでに大戦前から社会カトリック的な学生運動と関わっていたプラッツは、戦後に「青春の泉 (Quickborn)」運動と繋がりを持ち、本書はそこから出版された。なお、プラッツとデンプフが出会ったのも「青春の泉」運動を通してである。Vgl. auch: Hermann Platz, *Die Früchte einer sozialstudentischen Bewegung*, Mönchen-Gladbach: Sekretariat sozialer Studentenarbeit, 1913; ders., *Im Ringen der Zeit. Sozialethische und sozialstudentische Skizzen*, Mönchen-Gradbach: Sekretariat sozialer Studentenarbeit, 1914.

26 Hermann Platz, *Deutschland, Frankreich und die Idee des Abendlandes*, Köln: Verlag der Rheinischen Zentrums-Partei, 1924 (auch in: Berning (Hg.), *Hermann Platz 1880-1945*, S. 122-141). 本書は、ライン問題に関するライン中央党のパンフレット・シリーズのなかの1冊 (Flugschrift der rheinischen Zentrumsparthei zum Rheinproblem, II. Folge, H. 2) として出版された。本書を引用する場合は、バーニングが1980年に編纂した版のページ数を記す。

27 Vgl. Pöpping, *Abendland*, S. 101, Anm. 72.

フランスのナショナリズム (Nationalismus) に関する研究 (次いでドイツのナショナリズムについての研究) は、私に次のことを教えた。すなわち、スーパーナショナルな実体 (übernationale Substanz) にしっかりと繋ぎ合わされた場合にのみ、ナショナルな激情 (nationale Leidenschaft) は克服されうるということを²⁸。

こうしてプラッツは、大戦後の独仏関係の改善を「スーパーナショナルな」形でめざしていく。その際プラッツは、フランスの民主主義的な改革派のカトリシズム運動が、当地で支配的な反独ナショナリズムを覆すことを期待した。それゆえ、『アーベントラント』に寄稿したプラッツの論説には、フランスのカトリシズムについてのレポートが少なくない²⁹。

このようにプラッツは、知仏派であり、親仏派とも言える人物であった。ただしそれ以上に、あくまでドイツ愛国主義者であり、何よりもライン愛郷主義者であったことは強調しておきたい。フランスによるラインラント併合要求には激しく反対し続けたし、フランス側からラインラント併合について協力するよう依頼された際には、強く反発した³⁰。あくまでラインは「生粋のドイツの地であり、永遠にドイツの地」なのであった³¹。

そして、プラッツの「アーベントラント」思想は、まさにライン中心主義と呼ぶべきものである。『アーベントラント』の創刊号で彼は次のように述べる。

われわれは、ドイツ的な精神から、ドイツの地で、人文主義的・キリスト教的な生を歩み続けようとしている。東と北からは、恐ろしい軍

28 Platz, "Von politischer Not und von abendländischer Idee," in: ders., *Um Rhein und Abendland*, S. 59-64, hier S. 61. 傍点は原文のゲシュペルト。以下、本稿の引用文中の傍点は原文の強調 (ゲシュペルト、あるいはイタリック) である。また、原語を引用する際はゲシュペルトの部分に下線を引いた。

29 E.g. Hermann Platz, "Die französischen Katholiken und der Völkerbund," *Abendland*, Jg. 1, Heft 8, Mai 1926, S. 241-243; ders., "Abendländischer Geist in Frankreich," *Abendland*, Jg. 3, Heft 2, November 1927, S. 52-54; ders., "Frankreich und die Möglichkeiten katholischer Politik," *Abendland*, Jg. 5, Heft 2, November 1929, S. 66-68.

30 Platz, "Um Rhein und Ehre," *Hochland*, Jg. 16, 1919, S. 129-139.

31 Platz, *Deutschland, Frankreich und die Idee des Abendlandes*, S. 122.

隊、遅い男たち、沈思黙考する人、怖いもの知らず、思い焦がれた欲望が流れ込んだ。他方、南と西からは、本質を捉え、思想と目的が明確で、しばしば冷酷で打算的な人々が到来した。この間にわれわれは、かつて地中海の岸辺に花開いた、到達可能で分別のある人間存在の様式を、東と北に約束した。またわれわれは、永遠のロマン主義の地で偉大な生の魔力から生じた生命力と想像力を、西と南に約束した。／アーベントラントの文化 (abendländische Kultur) は、南海から北海まで、南西から北東まで行き渡る。ライン川こそ、宿命的な中心点であり、継ぎ目、結線、精神的な転換点であり、摂取や移行や継続が行われる地なのではないだろうか？³²

そして「アーベントラント」は、ライン川を中心に、ドーム状に広がっている (überwölbt) のである³³。

宗教と生の有機的な結合としての「アーベントラント」理念

プラッツによると「アーベントラント」は「知覚可能な」「現実」であり、「歴史的な力」であり、「理念 (Idee)」である。この理念は、「地域的には (landschaftlich) カール大帝による生存圏 (Lebensraum) と結びついている」とされた。一方で「ロシアは、ピョートル大帝やその後継者たちによる西欧化の試み (Verwestlichungsversuche) にもかかわらず、決してそこに属してはいない」。他方、「イギリスは、アーベントラントを越えて、目的に基づく繋がりななかで広がり続けている」という。つまり、「西欧化」に至らないロシアと、広大な帝国を海外にもつイギリスは「アーベントラント」から除外されている³⁴。

32 Platz, "Abendländische Vorerinnerung," *Abendland*, Jg. 1, Heft 1, Oktober 1925, S. 4-6, hier S. 5.

33 Platz, *Deutschland, Frankreich und die Idee des Abendlandes*, S. 122. 「アーベントラント」や「ヨーロッパ」を、複数のネイションの柱に支えられた円屋根・ドーム (Kuppelbau) に喩えるのは、『アーベントラント』周辺の人々の表現によくみられる。E.g. Karl Anton Prinz Rohan, "Die Utopie des Pazifismus (1925)," in: ders., *Umbruch der Zeit 1923-1930: Gesammelte Aufsätze*, eingeleitet von Rochus Freiherr von Rheinbaben, Berlin: Verlag von Georg Stilke, 1930, S. 22-24, hier S. 23.

34 Platz, *Deutschland, Frankreich und die Idee des Abendlandes*, S. 122-123.

また、「内容的には (inhaltlich) この理念は、古典古代、キリスト教世界、そしてロマンス的=ゲルマン的な諸民族の実生活のなかから生まれた」という。プラッツの長い説明を煎じ詰めると、「宗教と生の有機的な結びつき」が「アーベントラント」の理念を育んだのである³⁵。

しかし、この宗教と生の有機的な結合は、現代では失われた。「生の世俗化と物象化 (Verweltlichung und Versachlichung des Lebens)」が生じたのである。プラッツはその帰結を様々な領域で観察しているが、ここでは「政治」の領域についてのみ確認しておこう。プラッツによると、「宗教と生の繋がり」の粉砕は「宗教と政治の繋がり」の粉砕をも意味した。これに伴い、「政治の領域においては、国家の利害、ネイションの価値、人種の優先が、一方的に前面に押し出され、それにより、全体 (das Ganze) と個 (das Einzelne) を不断に支えるべき平和政策 (Friedenspolitik) はいっそう困難になってしまった」。世俗的な権力国家とナショナリズムの台頭により、本来ならば「アーベントラント」という「全体」に対する「部分」であるべき「国民国家 (Nationalstaaten)」は、権力政策とアウトルキーを追求し、相争うようになってしまった。独仏関係についても、「リシュリュウとビスマルクのあいだ」の時代に、「ナショナルなエゴイズム (Nationalegoismus)」と「ナショナルなメシアニズム (Nationalmessianismus)」が放たれた。そして、悲しむべきことに、「この歪みと硬直を決定的に示すものが、ラインの現状なのである」。こうして、「アーベントラントの統一性と共同体は救いようもなく破壊されてしまった」のである³⁶。

プラッツは、かかる現代を「秩序と形式を喪失した (Ordnungs- und Formlosigkeit)」時代と規定する。「形式」を回復するには、社会を有機

35 Ebd., S. 123.

36 Ebd., S. 123-126. 思想的には、フィヒテの選民思想からトライチュケの権力国家崇拜に至るドイツ・ナショナリズムの歴史が批判される (ただし、フィヒテの思想には普遍主義的な側面があったことも指摘されている)。この点では、カトリックによる通俗的なプロイセンの小ドイツ・ナショナリズム批判と言えるのだが、プラッツの独自性は、フィヒテのナショナリズムの「形式」と「手法」が、フランスのナショナリストたち、たとえばレオン・ドーデ (Léon Daudet, 1867-1942) やシャルル・モーラス (Charles Maurras, 1868-1952) からアクション・フランセーズの面々にも受け継がれていると論じているところである。Vgl. ebd., S. 127-137.

的に繋ぐ(あるいは繋ぎ直す)しかない。たとえば、中央党の依頼で、1925年8月11日にヴァイマル憲法についてライヒ大統領、政府、議会の前で演説する機会を得たが、そこで開陳されたのは、プラッツのヴァイマル憲法への熱烈な支持とともに、有機体論的な世界像であった。彼はこう述べた。「各構成要素 (Glieder) が全体 (Ganzen) に奉仕するとき、ドイツは再び花開き、新たな日を迎えることができるでしょう。そして、ヨーロッパや世界も、精神的な全体として、独立した実体の担い手として [……] 認識されたならば、再び形式を取り戻すでしょう」³⁷。

またプラッツは、『アーベントラント』創刊号の巻頭言でも、次のように述べている。「本誌は、散り散りになったものを再び集め、道を踏み外したものを正しき方向に戻し、われわれがナショナルな孤立の時代において失った全体性への限りなき愛によって、あらゆるものを統一性へと結びつけるだろう。われわれは確信している。生き生きと過去を振り返る精神の試みと、未来への見通しによって、まさにドイツ民族において、時代精神が押しつけた最良の力が、全体の至福のために再び発揮されることを。そして、ドイツの諸族 (Stämme)、諸身分 (Stände)、民族 (Volk)、国家 (Staat) が、新たな秩序ライヒ (Ordnungsreich) へと有機的に組み合わせられることによって、新しい力と、個々の生の新たな充足を見いだすことを」³⁸。

そして、プラッツにおいては、秩序を回復し、形式を付与できるのは、カトリシズム以外になかった³⁹。「ヨーロッパの運命が描かれている教会の伝統という枠組みにおいて、カトリックが、アーベントラントの実体 (abendländische Substanz) を意識するのは比較的容易い。カトリックはこんにち、この生の統一体 (Lebenseinheit) の唯一の有機的な担い手である。[……] 自らの力と責任でこの実体を再び得るのは、プロテスタントにはより難しいだろう。自由思想家 (Freidenker) にはもっとも困難である [……]」⁴⁰。そして、とりわけ敗戦国である「ドイツは、工業家

37 Berning (Hg.), *Hermann Platz 1880-1945*, S. 149.

38 “Aufruf!,” *Abendland*, Jg. 1, Heft 1, Oktober 1925, S. 3. 本論説は無署名だが、明らかにプラッツの手によるものである。

39 ただしプラッツは、1925年から『ウナ・サンクタ (Una Sancta)』というエキュメニカルな雑誌の共同編集者も務めている。『ウナ・サンクタ』は1927年4月11日にヴァチカンによって禁止された。

や金融業者ではなく、カトリックを通して、精神世界の全体性と有機的に繋がっている」のであり、ドイツのカトリックは「特別な課題」を負っているのである⁴¹。

こうして、「アーベントラント思想の目的」は次のように定式化される。つまり、「教会権力と世俗権力の理性的な協働を通じて、各構成要素 (Glieder) が自律的かつ連带的に存在でき、キリスト教的な平和を獲得し保障するような、一つのライヒ (ein Reich) を打ち立てること」である⁴²。

近代批判とフェルキッシュ批判

かかる「有機的」な「アーベントラント」思想と表裏一体のものとして、プラッツの著作には激しい「近代 (Moderne)」「近代化 (Modernisierung)」批判がみられる。プラッツの近代批判は、1924年に出版された論文集『大都市と人間存在 (Großstadt und Menschentum)』で最も鮮明に表れている⁴³。そこで展開されるのは、カトリックによるお馴染みの近代批判である。つまり、近代化によって、世俗化および個人主義化が促され、人間は孤立し、価値も崩壊し、現代社会は精神的にも政治的にも貧困となった、という具合である。

ただ、ここで注意したいのは、プラッツがこうした近代批判を展開する際に肯定的に参照したのが、ラガルド (Paul de Lagarde, 1827-91) だったということである。ラガルドは、一部の研究ではゲルマン・イデオロギーやフェルキッシュ思想の源流の一人と位置付けられる人物である⁴⁴。また、

40 Hermann Platz, "Sendung und Dienst," in: ders., *Um Rhein und Abendland*, S. 140-150, hier S. 147-148.

41 Platz, *Deutschland, Frankreich und die Idee des Abendlandes*, S. 138.

42 Ebd., S. 140.

43 Hermann Platz, *Großstadt und Menschentum*, Kempten: Verlag J. Kösel & F. Pustet, 1924.

44 E.g. Fritz Stern, *The Politics of Cultural Despair. A Study in the Rise of the Germanic Ideology*, Berkeley / Los Angeles / London: University of California Press, 1961 (中道寿一訳『文化的絶望の政治——ゲルマン的イデオロギーの台頭に関する研究』三嶺書房、1988年), pp. 3-94; George L. Mosse, *The Crisis of German Ideology: Intellectual Origins of the Third Reich*, New York: H. Fertig, 1999 (1964) (植村和秀ほか訳『フェルキッシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房、1998年), esp. Ch. 2.

プラッツが参照したラガルド伝の著者であるシェーマン (Karl Ludwig Schemann, 1852-1938) は、(悪名高い) ゴビノー人種学の研究者であり、ゴビノー協会とストラスブールのゴビノー・ミュージアムの設立者であった⁴⁵。ラガルドは、ドイツに蔓延する「非精神性 (Ungeistigkeit)」の原因を「プロイセン的=ドイツ的な様式」の普及にみた。ラガルドにとって、それは「人造的 (Homunkulität) かつ人工的なもの (Kunstprodukt)」であった。プラッツは、こうしたラガルドの同時代ドイツに対する診断を評価したのである⁴⁶。

しかし、プラッツはラガルドを全面的に肯定したわけではない。何よりもラガルドは、現代ドイツの病を「ゲルマン的な」「魂の文化 (Seelenkultur)」に還ることによって克服しようとした。しかしかかる態度は、プラッツから見ると「古ゲルマンへのロマン主義的な逃避 (romantische Flucht ins Altgermanische)」⁴⁷に過ぎなかった。また、プラッツの「スープラナショナルな」有機的思考にとって、フェルキッシュ思想は狭隘であった。プラッツは、戦間期ドイツに普及したフェルキッシュ思想・運動に対して不満を述べている。

本質や権力から逃避しまいという意志を、最も強力に、しかし最も近視眼的で最も盲目に有しているのが、フェルキッシュである。[……]しかし、個を全体に関連付けること、個を全体のなかで動的に想定すること、[フェルキッシュには] まさにこれが欠けているのだ！⁴⁸

こうしてプラッツは、反近代的なドイツ愛国主義者でありながらも、フェルキッシュなナショナリズムは拒否することとなった。

45 Ludwig Schemann, *Paul de Lagarde. Ein Lebens- und Erinnerungsbild*, Leipzig: E. Matthes, 1919.

46 Hermann Platz, "Paul de Lagardes romantische Flucht ins Altgermanische," in: ders., *Großstadt und Menschentum*, S. 97-147, hier S. 103-104.

47 これが彼のラガルド論のタイトルである。

48 Hermann Platz, "Von der Auflockerung des europäischen Sinnes," in: ders., *Um Rhein und Abendland*, S. 133-139, hier S. 137.

ナチ政権とプラッツ

プラッツは、1933年のナチ党の権力掌握に対して、おそらく鈍感であった。まさか自分の身に危機が迫るとは考えていなかった節がある。しかし、ナチは彼を見逃さなかった。1934年12月に作成されたナチの大管区指導部の文書にはこう書いてある。

ボン大学のなかでは、プラッツ教授が11月体制〔ヴァイマル共和国のこと〕の典型的な代表者の一人である。ファナティックな政治的カトリックとして、彼は現在でも、ザール地域やルクセンブルクの政治的カトリシズムのあいだで人望を集めている。そのうえ彼は、きわめて遺憾なかちで熱烈な親フランス政策を長きにわたって主張しており、当然ながらフランスの多くのサークルで特別な共感を呼んでいる。その一方で、われわれの見るところ、彼はいかなる国民社会主義の思想も受け入れていない。ボンで彼は、いみじくも「共和国のプラッツ (Platz der Republik)」という渾名をつけられている。ボン大学から彼を解雇することは、われわれの運動の立場からは絶対に必要である⁴⁹。

こうしてプラッツは、1935年3月にボン大学の職を解かれてしまう。この措置に対しプラッツは、当初は沈黙していたが、子供たち（当時20代の四人の息子と一人の娘がいた）の名誉のためとして、36年2月20日に正式に解雇の撤回を求める文書を提出した。その文書では、世界大戦への貢献をはじめ、プラッツのドイツ愛国主義とライン愛郷主義が強調されていたが、ナチスへの阿りはなかった⁵⁰。結局、復職は叶わなかった。その後プラッツは、パスカルやボードレールなどについて、細々と文筆活動を続けた。またニーチェやヒューストン・スチュアート・チェンバレンのような時局に沿うような対象も扱っているが、そこでも決してナチ的な解釈が展

49 Frank-Rutger Hausmann, "Aus dem Reich der seelischen Hungersnot" : *Briefe und Dokumente zur romanistischen Fachgeschichte im Dritten Reich*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 1993, S. 69, Anm. 85.

50 Eingabe von Hermann Platz an das REM vom 20. Februar 1936, UAB, Personalakte Platz, in: Hausmann, *Aus dem Reich der seelischen Hungersnot*, Dok. XXII, S. 172-173.

「西洋の救済」(2)

開されていたわけではない。

プラッツは、敗戦後の1945年5月28日、ロベール・シューマンの推挙でノルトライン州の文化部長（のちのノルトライン・ヴェストファーレン州の文部大臣にあたる）に任命されるが⁵¹、具体的な活躍をすることなく同年12月4日にこの世を去ることになった。死後出版された回顧録でプラッツは、「わたしは常にドイツ人であると同時に西洋人として（als Deutscher und Abendländer zugleich）行動した」と記している⁵²。

さて、『アーベントラント』周辺の人々が、ナチズムにとった態度は様々であった。編集責任者のなかでは、プラッツに加え、デンプフもナチ体制に睨まれ、教職を妨害された。また、ブリーフスとブラウアーは、ナチの政権掌握後すぐに亡命せざるをえなかった。前述のようにキュンツァーはレジスタンスに参加し、結局SSに殺害された。他方、カトリック・アカデミカー連盟のミュンヒのようにナチスと協働を図る者、シュライフォールグのようにナチスに実際に加わる者もいた。そこで次章では、ナチズムに対してアーベントラント主義者たちが取った態度、そしてナチ政権期における「アーベントラント」のトボスを検討しよう。

【注記】

本誌77号に掲載した「西洋の救済（1）」の執筆から1年が経ち、研究が進むにつれて、本論文は当初の予定よりも長大なものとなった。それに伴い、本号掲載分は77号で予告した目次・構成とは若干異なってしまったことをお詫び申し上げたい。今後は、本号掲載分のように、内容に応じて副題を変更していくこととする。本研究は、将来的には一書に纏めたいと思っているので、全体の整合性はそのときにつけたい。

なお、本号掲載分については、戦間期研究会（科学研究費補助金（基盤研究（B））「戦間期ヨーロッパにおける国家形成と地域統合に関する比較研究」（研究代表者：大島美徳・津田塾大学教授）関連。2013年7月21日、東京外国語大学本郷サテライト）で報告する機会を得た。貴重なコメントをくださった先生方に厚く御礼申し上げます。

また、申し遅れたが、本誌77号に掲載した「西洋の救済（1）」は、日本比較政治

51 Becker, “Wegbereiter eines abendländischen Europa,” S. 258.

52 Hermann Platz, *Die Welt der Ahnen. Werden und Wachsen eines Abendländers im Schoße von Heimat und Familie, dargestellt für seine Kinder*, Nürnberg: Glock u. Lutz, 1948, S. 55.

学会第15回研究大会（2012年6月24日、日本大学法学部）の自由企画『『保守のヨーロッパ』：保守主義vs.キリスト教民主主義』、および世界政治研究会（2012年11月30日、東京大学山上会館）で報告する機会を得た。比較政治学会で討論者を務めてくださった田口晃先生と水島治郎先生、世界政治研究会で討論者を務めてくださった網谷龍介先生と上原良子先生、そして各会場で貴重なコメントをくださった先生方に厚く御礼申し上げたい。

なお本稿は、平成24年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「ドイツ政治外交史像の再検討——「伝統」と「革新」の視角から」および2012年成蹊大学アジア太平洋研究センター・パイロット研究プロジェクト「『アメリカ化』の日独比較戦後史に向けて」による研究成果の一部である。